

<論文（英語学）>

古英語訳Orosiusにおける拡充形

堀 口 和 久

目次	1 総論
	2 拡充形の頻度の高さ
	3 古英語訳Orosiusで拡充形として用いられている動詞
	4 古英語の拡充形の意味と機能（1）— 多数性と強調的意味
	5 古英語の拡充形の意味と機能（2）— 継続的機能
	6 結論

1 総論

古英語訳Orosiusは、拡充形（*beon/wesan*＋現在分詞）の頻度が極めて高いという文体的特徴を有する。この拡充形の意味・機能に関してはMossé(1938), Raith(1951), Nickel(1966), Mitchell(1985)などのいくつかの先行研究があるものの、不明な点が多い。この論文の目的は、古英語訳Orosiusについて拡充形の分布の状況を明らかにし、拡充形の機能・意味をできるだけ明らかにすることである。なお、この論文では、テキストとしてEETSのBatelyの刊本を用いている。

Appendix 1, 2に掲げたように、古英語訳Orosius全体で、238例の拡充形と考えられる用例が存在する。この頻度の高さについては、「2 拡充形の頻度の高さ」で論じる。そして拡充形の分布状況は極めて不均一であり、Chapter2,Chapter3の頻度が極めて高いのに対して、Chapter6の頻度は極めて

1 なお、こうした問題については、Nickel(1966)や、Mitchell(1985)が既に指摘している。

低いといってよい。

しかしこのような不均一性は、古英語訳Orosiusのみに見られる現象ではない。古英語訳Bedeや、*West Saxon Gospels*などの場合も不均一性が見出される。さらに、例えば、Ælfricの著作であれば、*Catholic Homilies I* (ed. Thorpe) の場合は106例の拡充形が存在するのに対して、*Catholic Homilies II* (ed. Godden) は53例となり、*Lives of Saints* (Non-Ælfricの作品を除く) では46例、*Homilies of Ælfric* (ed. Pope) では36例に過ぎない²。そして*Homilies of Ælfric* (ed. Pope) の場合、36例中、17例がwunianの例であり、これ以外の動詞の拡充形は極めてまれである。こうした現象、つまり同一作者によって書かれたほぼ同じジャンルに分類される作品であっても、作品ごとに分布状況に差が見られるため、拡充形といったSyntaxの中の一つの問題だけから、古英語Orosiusが複数の作者によるものと結論付けることはできないであろう。特に、OrosiusのChapter 6は3～4行の極めて短い行からなるパラグラフの連続である。これとかなり類似した文体は*Anglo-Saxon Chronicle*の年代記の文章や、医学書(*Herbarium*)などに見出すことができるが、こうした文章では拡充形は極めてまれにしか用いられない。従って、こうした文体的傾向を考えれば、Orosiusの文章における不均一性は不自然ではないと考えられるのである。古英語訳Orosiusの本文が単一の筆者からなるか否かは厳密には定かではないが、本論文ではとりあえず、全体を一まとまりの同一作者による作品として扱うこととする³。

2 拡充形の頻度の高さ

古英語のさまざまな作品を考えた場合、拡充形の頻度の高い作品としては、

2 興味深いことに、Ælfricの場合、*Heptateuch* (ed. Crawford) における拡充形の頻度は低く、20例に過ぎない。

3 複数の筆者か否かという問題に関しては、Batley (1980) もいくつかの側面から論じている。

古英語訳BedeやWærferthによる翻訳である*Gregory's Dialogue*, あるいは*Lindisfarne Gospel*の行間注解などを挙げることができる。ただしこれらの作品の場合には, その直訳的文体ゆえにラテン語の影響を考えなければならない。

また, *Blickling Homily* 13の場合, 一つのHomilyだけで, cweðanの拡充形が36例も用いられラテン語の影響が問題となるが, これほどの異様さは古英語訳Orosiusには見られない。

このような作品と異なり, 古英語訳Orosiusは自由訳であり, ラテン語の影響が少ないと考えられるにもかかわらず, 拡充形が多い。そして, 自由訳であるがゆえにこの頻度の高さは, これまで問題となり, さまざまな議論がなされてきた⁴。

しかしながら, 古英語の様々な他の作品を検討してみると, 拡充形が頻繁に用いられる文章はOrosius以外にも存在する。例えば, Fadda3 (HomS12)はLast Judgement を扱ったHomilyであるが, 短いHomilyの中で, 拡充形が18例も現れる。また, Fadda1でも11例の拡充形がある。さらに古英語期の*Anonymous Lives of Saints*においても幅広く拡充形が分布している。よって, Orosiusが極めて特異ということにはならないと考えられる。

3 古英語訳Orosiusで拡充形として用いられている動詞

Appendix 2 に動詞ごとの分布状況を示しておいた。拡充形として用いられている動詞として圧倒的に多いのは, 戦いを表す動詞である。例えば, feohtan, winnanなどが挙げられる。こうした動詞は他の古英語散文にも登場し, 例えばÆlfricでもfeohtan, winnanの両方がわずかであるが旧約聖書の歴史的イベントとの関連で, 拡充形として用いられている。

Ælfricではeardianやpeonが拡充形として用いられるが, 古英語訳Orosiusでは全く例がない。また, Ælfricの場合, wunianの頻度が極めて高いという特徴

4 例えば, Nickel(1966)p.110~を参照。

があるが、古英語訳Orosiusの場合こうした現象は見られない。

古英語訳Orosiusでは、わずかな例ではあるがpeowianの用例が存在するが、これは、Wulfstanの宗教散文と共通する。

なおbiddan, spreca, fleonなどについては、他の多くの古英語散文でも拡充形の用例が見られ、他の散文との間の共通性が見出される。

ラテン語の影響の強い古英語散文の場合、gonganやfyli(g)anといった場所の移動を伴う動詞の拡充形の用例が多いが、古英語訳Orosiusの場合、こうした用例は見られない。

4 古英語の拡充形の意味と機能 (1) — 多数性と強調的意味

Ælfricの著作である*Heptateuch*のJoshua 11章18節を見ると、興味深い用例を見出すことができる。

- (1) Lange he wæs feohtende on fyrnum burgum, 7 ælc buruhwaru wæs bugende to him...(ed. Crawford p.397)

なぜÆlfricはこの箇所では拡充形を用いているのであろうか。古英語における拡充形におけるAspectualityを重視して、langeという継続的意味を有する副詞句が存在するから拡充形が用いられているとも考えられる。しかしどうもこれだけではないのではあるまいか。なぜなら、継続的機能だけに着目すると、継続的副詞句が存在するにもかかわらず、拡充形が用いられていない多くの反例の存在が問題になってしまうからである。

なお、Ælfricが用いている戦いの動詞feohtanに関する拡充形は極めてまれであり、このヨシュア記の例と他にヨシュア記の一例(10章25節)と、*Lives of Saints*の*Maccabees*(3例用例があり、vividnessと関連すると考えられる)のみである。

この(1)の用例について詳しく見て見ると、具体的な戦争の対象・相手、敵、攻略した相手が次の章に列挙される形で明記されているのである。

(2) *Dis synd ða cyningas ðe Iosue ofsloh, 7 Israhela bearn, begeondan Iordane:*

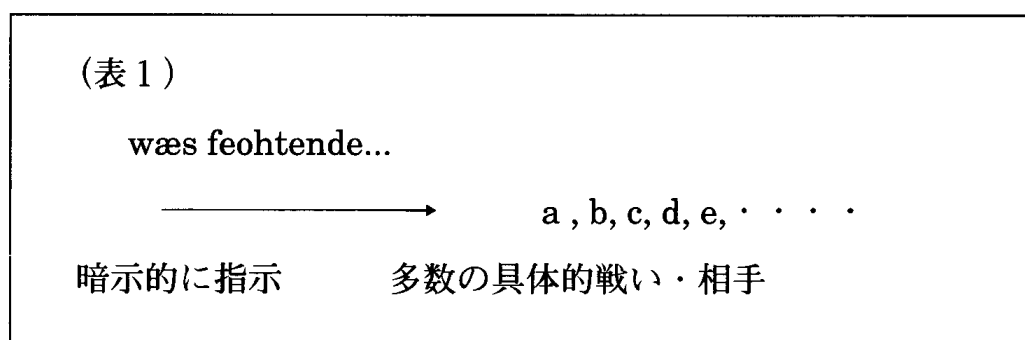
(ed. Crawford p.397)

Cyning on Ierusalem; Cyning on Hebron

Cyning on Thersa; ðæt is ealra cyninga an 7 ðritig.

(ed. Crawford p.397-398)

古英語Ælfricでは、この例に明らかなように、カタログのようにかなり多数の具体的事象がある場合に、それらをまとめて総称するときに拡充形が用いられている。これはアスペクト的機能とも関連するが、強調的機能の側面が強いと考えるべきであろう⁵。そして表1のパターンが念頭におかれる場合、拡充形はパラグラフなどの冒頭に置かれることになる⁶。



さらに類似の例が旧約聖書*Deuteronomy*の英訳に見出すことができる。

5 こうした問題は、Nickelの時間的枠(Rahmenfunktion)と関連するとも考えられる
Cf. Nickel(1966)p.248~p.258。

6 なおこのような文体的特徴は、Ælfricや古英語訳Orosiusにのみ限定的に見られる現象ではない。

*Deuteronomy*ではほぼ冒頭から、神はモーゼに語りかけている。しかしながら、神の語りで拡充形が用いられているのは、ただ1回だけ、32章48節の以下の用例だけである。

- (3) *Drihten wæs ða sprecende to Moyse, ðus cweðende:*
(ed. Crawford p.374)

この(3)の用例の直前に、約40ページにもわたる具体的な語りがあったから、ここで拡充形が用いられていると考えられるのである。

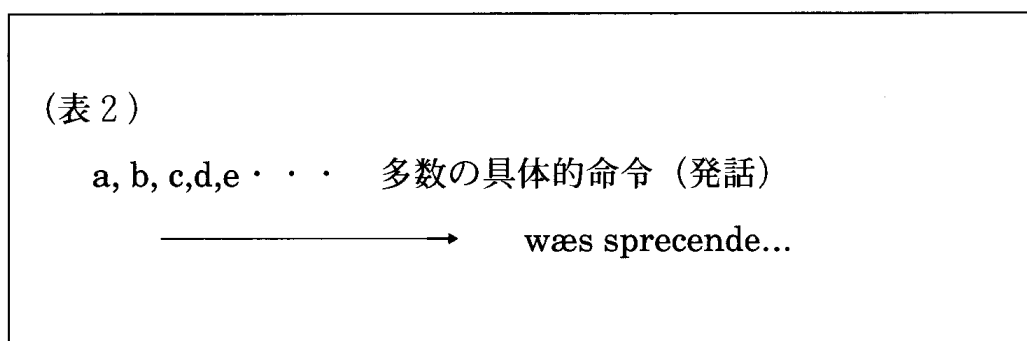


表1のパターンで、a, b, c, d, e...という具体的事実が明記されない場合、*wæs feohtende*は起動相的あるいは継続的に解釈されうる。また表2のパターンで、a, b, c, d, e...という具体的事実が明記されない場合、完了相あるいは継続相として解釈されうる。

なぜこのような説明をするかと言えば、これを出発点とすると古英語訳 *Orosius*の拡充形について説明しやすいと考えられるからである。

例えば、(4), (5)の例は、多数性が問題となるから、従属節であるにもかかわらず修辭的表現とともに拡充形が用いられているのである。また多数性が問題となるから、強調的表現となり読者・聴衆への訴えかけとなったのではあるまいか⁷。

7 なお反語表現等の修辭的表現と拡充形はしばしば古英語では共起する。

- (4) Hwa is þæt þe eall ða yfel þe hi donde wæron asecgan mæge oððe arec-
can?

(p.27/26-27)

- (5) Hu wene ge hwelce sibbe... þonne heora wif swa monigfeald yfel donde
wæron?

(p.31/20-21)

また、以下の(6)の例は、目次の部分でsprecenが拡充形で用いられている唯一の例であるが、なぜ目次でこの例のみが拡充形なのであるのか。この(6)の例に続く文章でカタログのように、多数のローマの皇帝が登場し、系譜が述べられていることと関係があるのではないか。

- (6) Hu Orosius wæs sprecende ymbe þa iiii onwaldas þara feower
heafedrica þisses middangeardes.

Hu Tiberius feng to Romano anwalde se casere æfter Agustuse.

...

Hu Archadius feng to Romana rice, 7 Honorius to þam westrice.

(p.6/20~p.8/8)⁸

以下のように、toeacanとともに多数性が問題となる文脈で拡充形が用いられる例も見られる。これらの用例は、表2のパターンと関連があると考えられる。

- (7) toeac[an] þæm oprum monigfealdum bismrum þe hi him lærende
wæron...

(p.87/29)

8 huとともに共起している類似の例としては、p.34/8を挙げることができる。

- (8) Toeacan þæm monigfealdum bismrum þe he donde wæs...(p.137/20)

以下の(9)の例は、同様にtoeacanとともに拡充形が用いられている例であるが、oðerra cyninga（他の王たち）の例は、カタログのように列挙されている。アレクサンダー大王に対して絶えず攻撃をしかけたという箇所も拡充形が用いられている。

- (9) Næs his scinlac ne his herigung on þa fremdan ane, ac he gelice slog 7 hiende þa te him on siml wæron mid farende 7 winnende. Æst he ofslog Amintas his modrian..., 7 sippan his broðor, 7 þa P[a]rmenion his þegn, 7 þa Filiotes, 7 þa Catulusan, þa Eurilohus, þa Pausanias, 7 monege opre þe of Mæcedonian ricoste wæron....

He Alexander toeacan þæm þe he hienende wæs ægþer ge his [agen] folc ge oðerra cyninga, he wæs sin[þyrst]lende monnes blodes.⁹

(p.71/13-25)

これら(7)(8)の例では、monigfealdという多数性を示す語が用いられているが、同じ語が用いられている用例として、他にも以下のような例がある。

- (10) 7 æfter his deaðe Sameramis his cwen...mid manigfealdon firenlustum twa 7 feowertig wintra wæs dreogende.(p.22/8~11)

- (11) ac eac swelce mid ungemetlicre wrænnesse manigfeald geligre fremmende wæs...

(p.22/2 1-22)

9 この例のsin[þyrst]lendeについては、Nickel(1966)p.266において、charakterisierende Funktionの観点から論じており、この指摘は妥当であると考えられる。

(12) On þæm dægum wæron þa mæstan ungetina on Romanum, ægðer ge on hungre ge on moncwealme, ... Ac þa monigfealdan iermþo þa werigan burg swiþe brociende wæran. (p.41/18-22)¹⁰

さらに多数性を示すmonigが用いられる例が多く存在する。

(13) þa com eac mid him seo ofermæte heardsælnesse 7 monegra ðeoda iermþa, seo longe æfter þæm wexende wæs, ...
(p.58/9-11)

(14) Æfter þæm Euredica, Aripeusses cwen, Mæcedonia cyninges, heo wæs þæm folce monig yfel donde...(p.80/3-4)

(15) Æfter þæm Scipia se consul, þæs oþres Scipian broþor, wæs monega gefeoht donde...(p.100/28)

(16) 7 tæm oprum, Gallienuse, wæron monog folc onwinnende, þæt ... Ærest Germanie þe be Donua wæron...
(p.145/5~12)

以下の(17)(18)の例では、具体的に多数性を指し示す語句はないが、文脈的に多数性が暗示されているケースである¹¹。

(17) On þære tide wæron Dioclitie iii cyningas on winnende: Caucarius on Bretlande, 7 Achileus of Egypta londe, 7 Marseus of Persum.(p.147/3)

(18) Æfter þæm Regulus se consul underfeng Cartaina gewinn. þa he æst þider mid firde farende wæs...Æfter þæm gefeaht Regulus wið iii Pena cyningas..

10 他の例としては、p.31/21, p.36/1-3を挙げることができる。

11 他の例としては、p.27/13-14を挙げることができる。

(p.93/19~34)

さらに戦争の多数性，反復継続性を暗示的に明示している箇所としては，これら以外にも 4章11節の冒頭のdreogendeと，第3章10節の終わり(p.76/22)のdreogendeを挙げることができる。なおこれらの用例の場合，続く文章で，戦いを意味する動詞が登場しても，一切拡充形が用いられない。以下の文章も多数のカタログ的表現が拡充形の前に用いられている。

(19) Galerius nom Ilirice 7 begeondan þæm þone eastende...7 Constantius nom ealle Italie 7 Affricam 7 Ispanie 7 Gallie... Ac he wæs hwon gier-nende þissa woroldþinga 7 micelra onwalda... (p.147/28~p.148/3)

多数性は、数の多さだけでなく、量の多さや巨大さとも結びつく。(20)や(21)は川の流れの巨大さとも関連すると考えられる¹²。

(20) 7 æfter þæm Eufrate ta ea, seo is mæst ealla ferscra wætera 7 is irnende...
(p.43/15)

(21) on þæm is iernende se ungefoglecesta stream;
(p.43/29)

多数性は巨大さと結びつき，巨大なローマや全世界との関連する場面で用いられることになる。

12 p.44/2で用いられているsprecende sieという拡充形の主語は，かつて巨大な都市であったバビロニアであり，無生物主語構文とともに用いられている。無生物主語構文で比喩的に用いられた表現とともに拡充形が共起する例としては，p.49/18~19, p.50/6~7を挙げることができる。

(22) 7 wæs æfter þære dædæ swa up ahæfen þæt he wolde ealne Romana
onwald him geagnian, 7 mid firde wæs farende...(p.150/11)

(23) 7 æfter þæm gefeohtum Perseus wæs ealne þone gear Romane swipe
swencende...
(p.110/21)

また多数性から派生して、拡充形は、程度のはなはだしさ・強調的機能と関連しvividnessや残虐性を際立たせる機能をも併せもつと考えられる。こうした点は、従来の拡充形研究でも一般的に指摘されている。

(24) 7 dæghwamlice wæs blotende diofolgildum mid monslihtum...
(p.155/27)

そこで、様々な強調的副詞句とともに共起する例も多く存在することになる。例えば、以下の(25)の例などが挙げられる。強調的副詞句と拡充形が共起する場合、前置詞midを伴う強調的副詞句が用いられるケースが多い¹³。以下の用例の場合、キリスト教の祈りを連想させる振る舞いと、苦難に対する嘆きと自殺に関する場面である。

(25) 7 he se cyning his handa wæs uppwardes brædende wið þæs heofones, 7
mid oferheortnesse him wæs waniende ægper ge his agene heardsælða
ge ealle þæs folces. 7 he þagiet him selfum gedyde þæt þær wyrrest wæs,
... 7 hiene selfne ofslog.
(p.89/25~29)

13 他の例としては、p.22/10-11, p.22/12, p.22/21-22, p.34/1, p.44/34-36, p.125/7-8, p.128/3が挙げられる

また、強調的副詞として、*swipe*, *georne*, *ungemetlice*, *unablinnendlice*, *georne*といった副詞と共起するケースも見出される¹⁴。

5 古英語の拡充形の意味と機能 — (2) 継続的機能

古英語の拡充形は、4で説明した強調的機能以外に、アスペクト的機能、継続的機能も併せ持つと考えられる。以下の(26)のような例、つまり拡充形+*op* (*pæst*)~という構文は、明らかに継続的機能を有しOrosiusでは頻繁に用いられている¹⁵。また、継続を表す時間的副詞句と共起する用例も見られる。

(26) *Hannibal ...besæt Saguntum...7 pær wæs sittende eahta monað, op he hie ealle hungre acwealde... (p.99/10~16)*¹⁶

6 結論

古英語訳のOrosiusの文章に関しては、拡充形の頻度が極めて高い。使われている動詞の分布に関しては、他の古英語散文とやや違いが見られるという側面もあるが、意味・機能に関しては、他の古英語散文とかなりの面で共通性を有すると考えられる。また、古英語期の拡充形の意味・機能を説明する場合に、「多数性」という観点からアプローチが可能であると考えられる。

14 例えば、p.39/34, p.41/13, p.44/27, p.47/33, p.48/12, p.52/32, p.55/3, p.68/30, p.72/21, p.73/11, p.85/18, p.85/34, p.104/19-20, p.128/20などを挙げるができる。

15 なお、この点に関しては、既存のRaith(1951), Nickel (1966)などの研究で既に指摘されている。

16 類似の用例は極めて多い。例えば、p.21/26, p.27/19, p.28/23, p.29/17, p.29/27, p.35/10, p.44/11, p.45/3-4, p.46/31, p.50/17, p.51/3~4, p.51/11~12, p.52/2, p.55/20-21, p.63/21-22, p.65/10, p.91/8, p.93/16, p.99/11~12, p.112/16-17, p.116/7, p.116/12, p.125/17などを挙げるができる。

Appendix 1

Titles	winnende(p.2/24) giernende(p.4/5) sprecende(p.6/20)
Chapter I i	irnende(p.8/23,p.11/6,p.11/10, p.12/21,p.16/22) flowende(p.11/7, 19)
Chapter I ii	heriende(p.21/26) feohtende(p.21/26,p.22/6,p.22/12) winnende(p.21/31) dreogende(p.22/11) wilniende(p.22/15) fremmende(p.22/22) ðyrste(n)de(p.22/20)
Chapter I iii	brucende(p.23/4) standende(p.23/6) wæstmberende(p.23/8)
Chapter I iv	No examples
Chapter I v	singende(p.23/23) secgende(p.24/8)
Chapter I vi	No examples
Chapter I vii	piniende(p.25/23) berstende(p.25/29) utsionde(p.25/30) sceorfende(p.26/2~3) æfterfylgende(p.26/12)

	gongende(p.26/24)
Chapter I viii	donde(p.27/14, p.27/27) winnende(p.27/19)
Chapter I ix	winnende(p.28/17) feohtende(p.28/19)
Chapter I x	farende(p.28/25) winnende(p.28/23,p.29/17,27) æfterfolgende(p.29/6) herigende(p.29/10) westende(p.29/10) sleande(p.29/27) onwendende(p.30/30) biddende(p.31/8) donde(p.31/21)
Chapter I x i	sittende(p.31/29) feohtende(p.31/30) dreogende(p.32/4, p.32/12) wraciende(p.32/7) æfterfylgende(p.32/9)
Chapter I x ii	iernende(p.33/20) forsacende(p.33/27) cwielmende(p.34/1) donde(p.34/5, p.34/17) prowiende(p.34/8)
Chapter I x iii	winnende(p.34/23, p.34/25)
Chapter I x iv	winnende(p.34/29)

古英語訳Orosiusにおける拡充形

	sittende(p.35/10) dreogende(p.35/18)
Chapter II i	wrecende(p.36/1) ricsiende(p.36/14, p.38/7) settende(p.38/15) wendende(p.38/15) libbende(p.38/20) p[e]lowiende(p.38/23)
Chapter II ii	stellende(p.39/4) iernende(p.39/14) feallende(p.39/15) biddende(p.39/15) poliende(p.39/30) winnende(p.39/32, p.39/34)
Chapter II iii	dreogende(p.41/11)
Chapter II iv	ondrædende(p.41/13) brociende(p.41/22) wuniende(p.42/16) irnende(p.43/15, p.43/29) færende(p.43/18, p.44/32, p.45/3) sprecende(p.44/2) æfterfylgende(p.44/11,p.45/5) hreosende(p.44/15) wenende(p.44/27) fleonde(p.44/27, p.45/4) drincende(p.44/30)

	<p>wuniende(p.44/33)</p> <p>pencende(p.44/35)</p> <p>pyrstende(p.45/8)</p>
Chapter II v	<p>feohtende(p.46/31)</p> <p>sprecende(p.47/5, p.48/34)</p> <p>geomriende(p.47/5)</p> <p>ehtende(p.47/7)</p> <p>wilniende(p.47/13)</p> <p>feohtende(p.47/18)</p> <p>bidde[nde](p.47/26,p.48/17)</p> <p>fleonde(p.47/31)</p> <p>lærende(p.47/33)</p> <p>ondrædende(p.48/12)</p> <p>æfterfylgende(p.48/12)</p> <p>farende(p.48/19)</p>
Chapter II vi	<p>birnende(p.49/19)</p> <p>winnende(p.49/25, p.50/17)</p> <p>cwaciende(p.50/7)</p> <p>berstende(p.50/7)</p> <p>teonde(p.50/16)</p> <p>gepafiende(p.50/17)</p> <p>wergende(p.50/22)</p>
Chapter II vii	<p>winnende(p.51/3)</p> <p>dreogende(p.51/12)</p>
Chapter II viii	<p>æfterfylgende(p.52/2)</p> <p>hergende(p.52/4,p.52/25, p.52/26)</p>

古英語訳Orosiusにおける拡充形

	sleande(p.52/4) bærnende(p.52/26) wilniende(p.52/33)
Chapter III i	giddiende(p.53/16) ondradende(p.55/3) winnende(p.55/20)
Chapter III ii	winnende(p.56/15) hergende(p.56/17)
Chapter III iii	No examples
Chapter III iv	No examples
Chapter III v	winnende(p.58/8, p.59/4) weaxende(p.58/11) cytende(p.58/11)
Chapter III vi	donde(p.60/20)
Chapter III vii	gemunende(p.61/2) winnende(p.62/11, p.62/14, p.62/31, p.63/8, p.63/30) peowiende(p.62/19) feohtende(p.62/31) hergiende(p.63/21, p.65/10) cirrende(p.64/27) sierwende(p.65/10) hienende(p.66/3) barnende(p.66/4) sleande(p.66/4)
Chapter III viii	forsugiende(p.67/4)

	secgende(p.67/4)
Chapter III ix	farende(p.68/4, p.71/14) ondrædende(p.68/30) fleonde(p.70/4) winnende(p.71/4, p.71/14) hienende(p.71/24) sin[tyrst]ende(p.71/25) feohtende(p.72/21) dreogende(p.73/4) ehtende(p.73/11)
Chapter III x	dreogende(p.76/22)
Chapter III x i	donde(p.80/4) winnende(p.81/3)
Chapter IV i	begongende(p.84/8) sleande(p.85/18, p.85/34) winnende(p.86/12)
Chapter IV ii	byrnende(p.86/29)
Chapter IV iii	No examples
Chapter IV iv	lærende(p.87/29)
Chapter IV v	brædende(p.89/25) waniende(p.89/26) girnende(p.90/2) fremmende(p.90/25~26) sleande(p.91/8) hienende(p.91/8) æfterfylgende(p.91/10)

古英語訳Orosiusにおける拡充形

	<p>hergende(p.91/12)</p> <p>bærnende(p.91/12)</p> <p>farende(p.91/28)</p>
Chapter IV vi	<p>feohtende(p.93/3)</p> <p>hergende(p.93/16)</p> <p>farende(p.93/19)</p>
Chapter IV vii	<p>dreogende(p.97/11)</p> <p>onwinnende(p.98/11)</p>
Chapter IV viii	<p>sittende(p.99/12)</p> <p>wenende(p.100/20)</p> <p>farende(p.100/21)</p> <p>þencende(p.100/22)</p> <p>donde(p.100/28)</p>
Chapter IV ix	<p>æfterfylgende(p.101/8~9)</p> <p>sleande(p.101/9)</p>
Chapter IV x	<p>wilniende(p.103/28, p.107/14)</p> <p>wenende(p.103/28)</p> <p>biddende(p.104/19, p.107/13)</p> <p>sleande(p.106/26)</p> <p>forhiende(p.106/34)</p>
Chapter IV x i	<p>dreogende(p.107/33)</p> <p>swencende(p.110/21)</p>
Chapter IV x ii	No examples
Chapter IV x iii	feohtende(p.112/16-17)
Chapter V i	dreogende(p.113/24)

Chapter V ii	*æfterfylgende(p.114/26) ¹⁷ winnende(p.116/7) wuniende(p.116/12)
Chapter V iii	irnende(p.117/9)
Chapter V iv	dreogende(p.118/28) farende(p.119/14)
Chapter V v	No examples
Chapter V vi	No examples
Chapter V vii	pafiende(p.121/25) donde(p.121/26)
Chapter V viii	No examples
Chapter V ix	oppyncende(p.123/2) biddende(p.123/5) weaxende(p.123/7)
Chapter V x	biernende(p.123/19) bradiende(p.123/21) farende(p.123/22)
Chapter V x i	farende(p.124/25, p.125/8) cirrende(p.125/3) æfterfylgende(p.125/17) dreogende(p.125/20)
Chapter V x ii	mænende(p.128/3) waniende(p.128/20)
Chapter V x iii	farende(p.129/23, p.129/24)

17 weordan十～endeの構文である。Wulfstanにはこうした構文が数例ではあるが用いられている。

古英語訳Orosiusにおける拡充形

Chapter V x iv	No examples
Chapter V x v	No examples
Chapter VI i	micliende(p.133/5)
Chapter VI ii	No examples
Chapter VI iii	No examples
Chapter VI iv	No examples
Chapter VI v	donde(p.137/20) biernende(p.137/25)
Chapter VI vi ~ x x iii	No examples
Chapter VI x x iv	winnende(p.144/22) onwinnende(p.145/6)
Chapter VI x x v	No examples
Chapter VI x x vi	No examples
Chapter VI x x vii	No examples
Chapter VI x x viii	No examples
Chapter VI x x ix	No examples
Chapter VI x x x	winnende(p.147/3) giernende(p.148/2)
Chapter VI x x x i	farende(p.150/12)
Chapter VI x x x ii	No examples
Chapter VI x x x iii	No examples
Chapter VI x x x iv	wilniende(p.152/19)
Chapter VI x x x v	No examples
Chapter VI x x x vi	pencende(p.154/7)
Chapter VI x x x vii	blotende(p.155/27)
Chapter VI x x x viii	No examples

Appendix 2

	OE Orosius
æfterfylgende	10
bærnan	3
begongende	1
berstan	2
biddende	7
birnende	4
blotende	1
bradiende	1
brædende	1
brociende	1
brucende	1
cierrende	2
cwaciende	1
cwielmiende	1
cytende	1
donde	10
dreogende	13
drincende	1
ehtende	1
farende	17
feallende	1
feohtende	11
fleonde	4
flowende	2

古英語訳Orosiusにおける拡充形

forhiende	1
forsacende	1
forsugiende	1
fremmende	2
gemunende	1
geomriende	1
geþafiende	1
giddiende	1
giernende	3
gongende	1
herigende	10
hienende	2
hreosende	1
irnende	10
lærende	2
libbende	1
mænende	1
micliende	1
ondradende	4
onwendende	1
onwinnende	2
oppyncende	1
piniende	1
ricsiende	2
sceorfende	1
secgende	2

settende	1
sierwende	1
singende	1
sintyrstende	1
sittende	3
sleande	7
sprecende	4
standende	1
stellende	1
swencende	1
teonde	1
pafiende	1
pencende	3
peowiende	2
poliende	1
prowiende	1
pyrstende	2
utsionde	1
waniende	2
wæstmberende	1
weaxende	2
wendende	1
wenende	3
wergende	1
westende	1
wilniende	6

古英語訳Orosiusにおける拡充形

winnende	31
wraciende	1
wrecende	1
wuniende	3
Total	238

Bibliography

- Bately, J. M. *The Old English Orosius* EETS. SS.6 (1980)
- Bethurum, D. *The Homilies of Wulfstan* Oxford (1957)
- Crawford, S. J. *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922)
- Fadda, L. *Nuove Omelie Anglosassoni Della Rinascenza Benedettina* Firenze (1977)
- Mitchell, B. *Old English Syntax* Oxford (1985)
- Mossé, F. *Histoire de la forme périphrastique être + participe présent en germanique* Paris (1938)
- Nickel, G. *Die expanded Form im Altenglischen* Neumünster (1966)
- Pope, J. *Homilies of Ælfric* EETS 259, 260 (1967-1968)
- Raith, J. *Untersuchungen zum englischen Aspekt I* München (1951)

(ほりぐち かずひさ 本学非常勤講師)